論　文

グローバル人材育成のための
国内人的資源を活用した英語集中講座の試み

福井　由美子[1]　岩下　いずみ[2]　関　文雄[1]　宇ノ木　寛文[2,*]

An Intensive English Course for KOSEN Students with Native English-Speaking Teachers and International Students

Yumiko Fukui[1], Izumi Iwashita[2], Fumio Seki[1], Hirofumi Unoki[2,*]

It has been reported that short-term intensive English courses abroad are effective in improving students' English language skills in various ways. They often lead students also to further English study. However, due to the impact of COVID-19, it has been very difficult to conduct any activities overseas since 2020. Therefore, we planned to hold an intensive English course in Japan, with the assistance of native English-speaking teachers and international students. If the course can achieve a certain level of effectiveness, it could function as an alternative activity that is easier for students to participate in, in terms of cost as well. As a result, such courses could also motivate students to engage in further activities in international context after the situation improves, in order to become global engineers in the future.

キーワード：高専、英語集中講座、グローバルエンジニア、留学生と外国人教師、COVID-19

Keywords：KOSEN, Short-term intensive English courses, Global engineers, International students and teachers, COVID-19

１．はじめに

短期留学を含む海外語学研修については、多くの先行研究により語学力の向上を中心に一定の教育効果があることが報告されている。熊本高等専門学校においても、独自の事業として或いは独立行政法人国立高等専門学校機構（以下「高専機構」とする）との協働事業として、これまで多くの海外研修を実施しているが、参加者に対する事後調査などから、その効果について肯定的に捉えており、2019 年度も複数の海外研修を計画していた。

ところが 2020 年 1 月以降、COVID-19 の世界的拡大のために国境をまたぐ活動を実施することが事実上不可能となり、2019 年度は予定したプログラムの一部の実施を中止せざるを得なくなった。その後 2020 年度以降も事態の改善は見られず、活動が困難な状況が続いている。

とは言え、グローバル人材育成及びそのための英語力向上の試みを止めることはできない。そこで本校では、国際交流協定締結校の協力によるオンラインを利用した活動に加え、国内在住のネイティブスピーカーである英語講師や留学生といった人的資源を活用した英語集中講座を実施することを計画した。

こうした活動が機能すれば、実施が困難となっている海外研修の代替プログラムとして、語学学習への動機づけだけでなく将来のグローバルエンジニアとしてのキャリアへの啓蒙に繋がることが期待できると考える。

本稿では、上述の活動の一環として 2021 年 8 月に実施した国内の人的資源を活用した夏期英語集中講座について報告する。

２．背景と目的

文部科学省は高専機構の第 3 期中期目標（2014 年度～2018 年度）において、「急速な社会経済のグローバル化に伴い、産業界のニーズに応える語学力や異文化理解力、リーダーシップ、マネジメント力等を備えグローバルに活躍できる技術者を育成する」ことを目標としてグローバル人材について初めて触れ(1)、その後第 4 期（2019 年

[1] 共通教育科
〒866-8501　熊本県八代市平山新町 2627
Faculty of Liberal Studies,
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501

[2] 拠点化プロジェクト系（グローバルリーダーシップ育成センター）
〒866-8501　熊本県八代市平山新町 2627
Faculty of Project Centers(Global Leadership Development Center)
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501

* Corresponding author:
E-mail address: unoki@kumamoto-nct.ac.jp (H. Unoki).

度～2023 年度）中期目標においても、「学生が積極的に海外へ飛び立つ機会を拡充するとともに、教員や学生の国際交流を安全面に十分な配慮をしつつ、積極的に推進する」ことを目標に掲げグローバル人材の育成を推進している[(2)]。

熊本高専も 2009 年の開校時より「日本と世界とのかかわりに関心を持つ」学生を育成することを学習・教育到達目標の一つとしている。2016 年度から 2018 年度までは、3 年間にわたり高専機構のグローバル高専事業に「展開型」としての認定を受け、グローバル人材育成のために様々な活動を推進してきた。さらに、同事業の終了後 2019 年 4 月に、高専機構より「学生を世界で活躍できる“グローバルエンジニア”として育成するため、学生が広く世界に目を向け、積極的に海外へ飛び立つ機会を拡充することで、学生自らの積極的・意欲的な学習を促し、特に英語を中心とした国際コミュニケーション力については、客観的な成果指標を設定し確実に向上を図る」ことを目的として「2019 年度グローバルエンジニア育成事業」（以下「GE 育成事業」とする）参加校が募集されるにあたり、本校は、①外国人教員と日本人教員との協働による英語を用いたコミュニケーション能力の向上、②リベラルアーツ教育の充実・強化を通した理数系教育と語学教育の融合・強化、③低学年国際交流プログラムの拡充・展開、の 3 つの事業を柱とした「理数系を含むリベラルアーツ教育への外国人教員活用と協定校との国際交流プログラムを通じた高専低学年時の英語基礎力養成プログラム」を同事業に応募して認定を受け、さらにグローバル人材育成を推進する機会を得た。

ところで、1 でも述べたように本校ではグローバルエンジニア育成のために様々な事業を行ってきたが、特に学生を海外に派遣して実施する活動で、海外の国際交流協定締結校の協力を得た海外英語集中講座は複数実施しており、プログラムによっては他高専の学生にも門戸を広げて行われたものもある。

例えば 2019 年までシンガポールで実施してきた「高専生のための英語キャンプ」では、全国の高専生が 2018 年は 21 名、2019 年は 18 名が参加した。講座は高専機構の国際交流協定締結校である Singapore Polytechnic の協力を得て、同校教員の指導の下、同校学生のサポートを受けて実施され、参加者は 16 日間にわたり英語学習や異文化理解の活動に取り組んだ。結果として、講座がコミュニケーション能力の向上や異文化理解の深化、さらには将来のグローバルエンジニアとしてのキャリアの啓蒙に、非常に効果的なものであったことが、参加学生のアンケート等により示されている。

反面、本校の参加者が 2018 年度は 3 名、2019 年度は 5 名に留まっており、このプログラムに限らずさらに多くの学生が海外派遣型の活動に参加することが望まれる状況が続いていた。

本校では毎年多くの短期・中期の留学生や訪問学生も受け入れており、そうした学生との交流を中心とした活動も数多く行ってきている。そこで、上述の GE 育成事業においては、特に低学年において、本校に受け入れた異なる文化的背景を有する学生との英語による交流を体験することで、グローバルな活動への心理的障壁を解消して将来の国境をまたぐ活動への参加を促し、同時に以後の英語学習への動機づけとすることを計画した。今回のプログラムはまず、そうした将来の活動への動機づけとなることを意図している。

さらに、こちらも上述のように 2020 年の COVID-19 の世界的拡大以降、実際に交流協定校における海外派遣型の活動が困難になっていることから、そうした活動の一部を代替できるプログラムとして発展させることも今回の実施のもう一つの目的とした。

３．プログラムの概要

3.1 募集要項及び事前準備

表 1 に学生募集の際に使用した実施要項より一部を抜粋する。

実施にあたっては、本校常勤英語科教員 4 名に加え、ネイティブスピーカーの非常勤教員 2 名で、2 か月ほど前から定期的にミーティングを実施し、コンテンツや実施形態等を協議した。また、本校八代キャンパスの留学生 4 名に TA として講座の支援協力を得て、リハーサルを含め複数回の打ち合わせを行った。

その際、ネイティブスピーカーと実際に英語を用いてコミュニケーション活動をした経験のある学生が少なく、ツールとしての英語の技能についてブルームのタキソノミーの「記憶」或いは「理解」レベルにある学生が多いと推察されたことから、講座の活動が参加者の技能を「応用」レベルに発展させるきっかけとなることを意図してコンテンツの作成にあたった[(3)]。

表 1　募集要項抜粋

〔名称〕　高専低学年生のための夏期英語集中講座

〔概要〕　外国人教師をファシリテーター、外国人留学生をティーチングアシスタント（TA）として教室内では英語のみを使用することで、海外英語キャンプに近い雰囲気の中で学習を進める。

学習効果を挙げることはもちろんであるが、できるだけ英語を話す機会が増えるような活動も交え、楽しみながら参加できるようなプログラムを準備しています。

〔期間〕　2021 年 8 月 25 日（水）、26 日（木）、27 日（金）

＊毎日 9 時 00 分~15 時 00 分、合計 18 時間を予定

〔場所〕　熊本高専八代キャンパス 3F 旧 2BC 教室、他

また、実施時期が全国的に COVID-19 拡大に伴う緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の発出・適用と重なったため、学校執行部と複数回にわたって情報交換を行って感染防止策を講じた。参加者には、講座前 1 週間の検温を含む「保護者承諾書兼健康チェックシート」の提出による事前の健康確認を義務付け、保護者の承認を得た上で講座参加を許可した。講座中は、性質上会話等発声は不可欠であるため、常時の換気や定期的な手指及び使用器具の消毒、定められた場所と時間以外の飲食の禁止等の措置を取り、講座後も全参加者について 1 週間の追跡調査を実施し、感染と拡大の防止に努めることとした。結果として、講座を原因とする感染者の発生や拡大は防止することができた。

3.2 スケジュールと実施形態

3.1 で挙げたように、教室内では英語のみを使用することを義務付け、できるだけ英語を発出する機会を参加学生に与えるため、表 1 に記したスケジュールに基づいて、参加学生の理解度や疲労度を観察しながら適宜柔軟に対応して講座を実施した。

講座中は参加者を 3~4 名の 5 グループに分け、各グループに 1 名の留学生が TA として付く形をとり、アクティブラーニングと英語によるコミュニケーションの継続を促進した。さらに、グループは毎日編成を変え、できるだけ異なる多くの参加者や留学生とコミュニケーションが取れるように工夫した。

一方、Team Presentation においては、習熟度が高まることを期待し、3 日間を通じて同じフォーマット、同じメンバーで行うことにした。

3.3 参加者

参加者は以下の通りである

・メインファシリテーター：
熊本高専非常勤講師（ネイティブスピーカー）2 名・サブファシリテーター：
熊本高専常勤講師（英語担当）4 名

・ティーチングアシスタント（留学生）：
機械知能システム工学科 5 年生
生物化学システム工学科 5 年生
生物化学システム工学科 4 年生
機械知能システム工学科 3 年生

・参加学生
機械知能システム工学科 3 年生　1 名
建築社会デザイン工学科 3 年生　3 名
生物化学システム工学科 1 年生　1 名
機械知能システム工学科 2 年生　1 名
機械知能システム工学科 1 年生　1 名
建築社会デザイン工学科 1 年生　6 名
生物化学システム工学科 1 年生　6 名
＊男子 6 名、女子 13 名

表 2　予定したスケジュール

	25（Wed）	26 (Thu)	27(Fri)
9:00 - 12:00	**1. Confirmation of attendance, health check, grouping** **2. Precautions for infection prevention during the course** **3. Ice Breaking & Team Building** - Introduction to each other - Interview, etc. - Paper Tower Challenge - Scavenger hunt	**1. Confirmation of attendance, health check, grouping** **2. Ice Breaking & Team Building** - Word game - Rhythm reading - Marshmallow Challenge - Scavenger Hunt 2 **3. Theme 2: Shopping & Favorite Pastime** -Words, phrases, sentences, questions related to shopping -Role play of shopping -What is a good souvenir to take to foreign countries? -Think of 4 items to buy to take to foreign countries.	**1. Confirmation of attendance, health check, grouping** **2. Ice Breaking & Team Building** - Charade - 2 true 1 false - 20 Questions - Cup Stacking **3. Theme 3: Travel** -Words, phrases, sentences, questions related to travel -Sharing their travel experience -Recommending good places to visit in Japan -Dream vacation
	Lunch Time		
13:00 - 15:00	**4. Theme 1: Food & Meals** - Role play, Quiz: description of food, recipe - Dream restaurant **5. Preparation for team presentation 1** - Model performance of team presentation - Choosing the topic of the preparation	**4. Team presentation 1** - Using whiteboard - Each group makes its presentation four times and the audience listens to all the groups. - Suggestion of how to ask good questions should be included **5. Preparation for team presentation 2** **- Choosing the topic of the preparation**	**4. Team presentation 2** - Using whiteboard - Each group makes its presentation four times and the audience listens to all the groups. - Suggestion of how to ask good questions should be included **5. Closing ceremony**

４．個別の活動

4.1 Ice Breaking & Team Building

3.3 に示したように参加者や留学生は異なる学科や学年に所属して互いの面識がなかったため、狙いの一つである「参加者ができるだけ異なる多くの参加者や留学生とコミュニケーションが取れるようになる」ために、毎日必ず Ice Breaking と Team Building のための活動を行った。また、当然ではあるがこれらの活動がその後の英語トレーニングのためのウォームアップ、或いはトレーニングそのものになるよう配慮した。

以下に、効果的であったいくつかの活動例を示す。

4.1.1 Word Game and Rhythm Reading（図 1）

グループごとにできるだけ多くの動詞を挙げ（e.g. “play”）、それに基づきシンプルな S+V+O 構造のセンテンスを即興で作成し（e.g. “I play the guitar.”）、英語のリズムに乗せて順に読み上げていく。参加者にとってはシンプルな動詞を使った短文であっても即興で文章にするのは難しく、口頭での即座のコミュニケーションのための効果的なトレーニングであり、同時にチーム対抗で挙げた語数と読みの正確性を競う形式をとったためゲーム性があり、Team Building としても適したものであった。

この活動は 2 日目に実施されたが、この後の Scavenger Hunt では「学校内の異なる場所で異なる動作をしている写真を撮ること」というタスクが課せられ、それぞれの活動が連携して効果を上げた。

4.1.2 20 Questions（図 2）

グループ内で一人の出題者が任意の単語（e.g. “Banana”）を設定し、他のメンバーが 20 以内の質問（e.g. “Is it an animal?”）でそれが何かを当てる活動で、参加者には適切な質問をその場で考える必要があるため、前述の Word Game と同様に即座のコミュニケーション力の向上に有効であると同時に、その後の Team Presentation に向けて効果的な Q&A Handling のトレーニングともなった。

4.1.3 Paper Tower Challenge, Marshmallow Challenge, Cup Stacking

いずれもその日のグループ形成後の Team Building として行った。Team Building としては一定の効果が認められている活動ばかりであるが、英語集中講座という性質上、その活動に必要な語彙・表現を学習した上で、競技中の指示は英語で行うことを義務付けた。

4.1.4 Scavenger Hunt（図 3）

Scavenger Hunt は様々な形式で実施が可能な活動であるが、基本的には「指定されたものを集め（Hunt）てくる」ことが要求される。今回の講座においては 2 種類の Scavenger Hunt を実施した。

1 日目には教員の名前アルファベット（e.g. S,E,K,I）で始まるもの（e.g. shoes）を学内から探して写真に撮ること、2 日目は 4.1.1. の Word Game の流れで、学内の異なる場所で異なる動作を行っているところを図のように写真に撮り、それを文章として描写することがそれぞれ課題として提示された。

いずれの活動においても英語の語彙力や表現力が要求されることは言うまでもないが、同時に、チームに貢献するために、コミュニケーションに不可欠である自分から意思表示する態度が求められる活動であった。

図 1　Word Game: 動詞の案出

図 2　留学生を交えた 20 Questions の様子

図 3　2 日目の Scavenger Hunt の一例
“Two girls are hiding behind a whiteboard.”

4.2 テーマに基づいた活動

講座のメイン活動の一つとして、各日テーマを設定してそれに基づく言語活動を毎日実施した。テーマは以下の通りである：

1 日目　Food & Meals

2 日目　Shopping & Favorite Pastime

3 日目　Travel

講座全体に言えることであるが、特にこの活動においてはアクティブラーニングの概念に基づき、参加者の発言や積極的なかかわりが促進されるよう工夫し、ロールプレイ、意見や体験の共有、質疑応答、討論、と言った口頭コミュニケーションのトレーニングに効果的とされる活動に加え、”Dream Restaurant”や“Dream Vacation”と名付けられた活動においては、与えられた課題についてグループで取り組み解決策を案出するアイデアソンの概念を一部取り入れて活動を行った。

各グループに配置された留学生 TA は、例えば問いかけを通して英語での発言やグループ活動への貢献を促しただけでなく、自分の体験や異なる視点からの意見を共有することで異文化に対する気づきを提供しという点で、非常に重要な役割を果たした。

4.3 Team Presentation

各日の学習グループとは別に、3 日間を通して活動する、2~3 名からなる 8 つのプレゼングループを編成して 2 日目と 3 日目に実施した。

1 日目にプレゼンテーマ例のリストを提示し、それぞれのグループがリストから選出した、或いは独自に考案したテーマについてプレゼンを案出し、翌日の午後に 1 回目を実施した。また、1 回目のプレゼン終了後に 2 回目のプレゼンテーマを準備し、3 日目に 2 回目を実施した。テーマは表 2 に示すように、意見が複数になり、プレゼンにおいて簡単なディベートやオーディエンスとの Q&A が発生、活性化するものを案出するよう促した。

プレゼン時は 8 グループをプレゼングループとオーディエンスグループに分け、前半と後半で役割を交代し、時間を設定してローテーションする形式をとった。1 グループが 4 ラウンドのプレゼンを行い、オーディエンスがすべてのプレゼンを聴くことができるよう工夫した。この形式をとることで、プレゼンの際ラウンドが進むに従いプレゼン自体に習熟する効果が確認できた。また、1 回目と 2 回目を同じフォーマットで実施することにより、1 回目より 2 回目の方が、内容、英語、態度すべてにおいてより高いレベルで実施できるというトレーニング効果が確認できた。

ここでも留学生 TA が同年代の視点から適切な質問を発することで Q&A の活性化に貢献する様子が見られた。

表 3　プレゼンテーマの例

- Which do you like better, sea or mountain?
- Should students study abroad？
- Is there value in meeting people through social networking services?
- Which do you like better, Japanese sweets or Western sweets?
- Are nuclear weapons good for world peace?
- If we can choose, which do you choose, a man or a woman?
- Is the Internet harmful to children?

５．成果と考察

この項では講座を実施して得られた成果とプログラムとしての有効性について考察する。

5.1 今後の英語学習への意欲向上

1 でも記したように、海外語学研修の教育効果については多くの報告がなされているが、中でも参加者の学習意欲向上の効果については、鈴木・林（2014）が約 3 週間の短期海外語学研修の結果「英語学習意欲や学習目的はより強く明確になり，コミュニケーションに対する積極性を高めた」ことを報告している [(4)]。高専生が参加したプログラムについては、吉田・小寺（2009）が 2 週間の研修における主に技能面での成果を扱っているが、その後の英語学習において「大きくプラスの影響を与えた」と評価している [(5)]。また、筆者が参画した、シンガポールにおける 2 週間の「平成 23 年度テマセク・ポリテクニック（TP）技術英語研修」においても、複数の研修参加学生が、講座終了後実際に海外を含む研究会で英語による研究発表を行うまでに継続学習へのモティベーション向上が見られたことが報告されている（高専機構国際交流室：2014[(6)]）。

本研修でも、参加者より「前よりも英語を学びたいという気持ちが強くなった」(1 年生)、「この講座に参加して、より一層の英語に取り組もうと思いました」(1 年生)、「もっと英語で話す練習を頑張ろうと思いました」(3 年生）等の意見が聞かれた。また、図 4 が示すように、参加者の全員が学習意欲の向上について肯定的であることが確認できた。こうした指標から、本研修の所期の目的の一つである「以後の英語学習への動機づけ」については一定の成果が上げられたものと評価している。

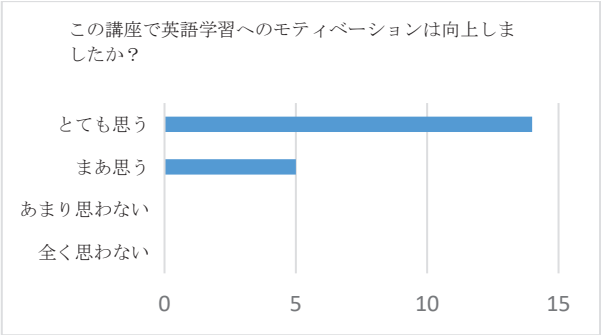

図 4　英語学習意欲向上に関するアンケート結果

5.2 代替プログラムとしての有効性

5.1 で述べた側面について吉田・小寺（2009）は「毎日のホームステイの中で実践的に英語を使う経験を積む中で、手応えと「自信」を感じたことは想像に難くない」と述べ、研修が海外で実施され、転地効果に加え授業外でも英語を使用する（せざるを得ない）環境がこうした肯定的評価に強く関係していることを指摘している。また、上述のシンガポール技術英語研修においても、TP の学生が Buddy として放課後の課題等の作成や異文化研修の支援に献身的にあたり、結果として教室外でも英語を使用する環境が整っていたことが研修効果を飛躍的に向上させたことを、引率にあたった筆者自身が記憶している。

その観点では、本研修は通常学習している教室で開催され、講座後は日本語の環境に戻らざるを得ないことから、講座の計画・準備段階では目的の達成に確信があったわけではなかった。

それが上述のように一定の成果を修めることができた要因の一つは、少なくとも教室内では海外英語研修と同様かそれに近い環境を再現できたことにあると考えている。具体的には、ファシリテーターも日本人教師も教室内では英語の使用を徹底したことで、参加学生が英語でコミュニケーションしやすい、或いはせざるを得ない状況が形成された。参加者からも「一日中英語しか話せない環境で過ごして英語を今までよりスムーズに話すことができた」（1 年生）、「三日間での英語の密度がすごかった」（3 年生）との意見が聞かれ学生の英語による発話を促進するのに非常に効果的であったと考えている。

少人数のグループに 1 名の留学生を TA として配置するという講座の形態も効果的であったと考えている。留学生は活動ごとに適切な問いかけや自分の意見を表明することで参加者の発言を非常にうまく引き出していた。

こうした工夫の結果、参加者が学習意欲の向上という一定の成果を上げることができたことは、国内でのプログラムでもこれまで海外英語研修の成果として考えられていたものが、たとえ一部ではあっても一定以上の再現が可能であり、国境をまたぐ活動ができない状況下で代替プログラムとして十分機能し得るものと考えている。

5.3 グローバルな視座の涵養

海外英語研修においては、語学力や学習意欲の向上だけでなく、異文化理解が促進されることはこれまでの多くの先行研究で明らかにされている。最近では、1 対 1 での個人レッスンを主体とするフィリピンでの短期間の語学研修においても一定の異文化理解の向上が見られたことが報告されている（松井・関田：2019[7]）。 これは、教室外でも英語を使用せざるを得ない状況が技能向上に資したのと同様に、異文化の中で実際に時間を過ごす機会を得たことが大きく影響するものと推察される。

翻って本研修は、最終的には「自」文化のコンテクストの中で行われたものであり、異文化理解がそれほど促進されるとはあまり期待していなかったが、参加者の意見の中には、「外国人との交流はとても貴重でした」（1 年生）、「実際に外国人と話すことができた」（1 年生）、「留学生の人と好きなことについて話したのが楽しかった」（1 年生）、「留学生やネイティブの先生と関わることができてよかった」（1 年生）、そして、その結果「次は海外に行ってみたい」（3 年生）といったものが散見された。

こうした意見からは、小学生から英語を「学習」している現在であっても、実際に外国人、つまり「自らとは異なる文化を背景として持つ人」との外国語によるコミュニケーションの機会が実際は多くなかったことが読み取れる。異文化理解では、誤解を恐れずに言えば、自分が知悉していない文化の異質性への気づきに端を発することが多いものと推察されるが、その意味ではそうした文化を体現する人＝外国人と交流することが第一歩であり不可欠なものであると考える。参加者のこうした意見は、たとえ国内でのプログラムであっても異文化理解のスタートラインに立つための刺激としては十分に機能し得るものであり、国内での活動への参加が国外での発展的な活動につながるものであることを確信している。

この点についても、参加者と同年代の留学生が、異なる文化に基づく事例や体験を参加者と共有する機会が多くあったことが参加者の異文化に対する気づきを促進するのに非常に有効であったことを付記しておく。

5.4 本科生と留学生との交流促進・留学生の価値再評価

これまで再三述べたように、母国を離れ母国語以外の環境で生活や学習をする能力を有し、また日本人学生が普段触れることのない、自らのものとは異なる文化を背景に持つ留学生の参画は講座の効果を向上させるのに大いに寄与した。

同時に、今回の講座の結果、こうした活動が留学生と日本人学生の新たな交流のきっかけとなり得ることを改めて認識した。留学生は技術を学ぶことが第一義で、外国語（日本語）での学習というハンデもあって、所属するクラス以外のシチュエーションで学習以外の活動に参加する機会があまり多くない。それが、今回はクラスの境界を越え様々な学年、学科の日本人学生と知り合うことができ、留学生にとっても新たな交流の機会となったことが伺えた。

5.3 で述べたように、留学生と交流できたことを成果の一つと考えている日本人学生は多かったが、留学生からも同様の意見が伺えた。語学力という自分の能力や日本人学生とは異なる文化に基づく経験を肯定的に活用できたこともさることながら、留学生の学内における交流の機会を広げるという観点からも、こうした講座を含む

活動に留学生の参加を得ることは、日本人学生、留学生双方にとって一定のメリットがあることを認識した。

5.5 Team Teachingによる外国人教師と日本人教師の教授法の共有

3.1 で述べたように、今回の講座を実施するにあたって、外国人教師を交え事前準備のためのミーティングを複数回実施し、また講座中も日本人教師がサブファシリテーターとして常時教室でサポートする体制を取った。そのことで、それぞれが持つティーチングメソッドを共有することができ、同時に今後に向けてのサジェスチョンを互いに得ることができた。GE 事業開始後は Team Teaching の機会を従来よりも増やして来たが、今回のような集中講座を実施するには、また別種の注意が必要となるため、結果としてお互いに新たな教育的視点を得ることができた。このことは、外国人教師、日本人教師ともにそれぞれの授業にフィードバックすることができ、その意味で、こうした講座の開催が Faculty Development にも寄与し得ることも実感した。

6．終わりに

これまで、COVID-19 の影響により実施が困難となっている海外研修の代替プログラムとして、語学学習への動機づけだけでなく、将来のグローバルエンジニアとしてのキャリアへの啓蒙の一助となることを意図して実施した、高専低学年生のための夏期英語集中講座について検証してきた。

その結果、今回実施した講座は、今後の英語学習への意欲向上及びグローバルな視座の涵養に一定以上の効果を有し、国境を越える活動が難しい中での代替プログラムとして十分機能し得ることを確認できた。加えて、留学生の支援が、講座の活性化だけでなく留学生と日本人学生の交流拡大につながること、こうした講座を実施することで教員同士の知識や教授法の共有の結果今後の授業改善にも資するという意味で Faculty Development としても有効であることを実感した。

とは言え、こうした国内人的資源を活用した講座は今年度初めての試みであり、今後工夫すべき点や改善すべき点が多々あることも認識している。そうしたことを再確認することで本報告の結語としたい。

6.1 適切な効果測定の方法とそれを可能にするための実施形態の改善

本講座は、上述のように事後の学習意欲向上とグローバルエンジニアという将来に向けての啓蒙となることを目的としていた。そのため、事前、事後の調査を含めた、英語の技能そのものの向上度合いを測定することには重点を置いていなかった。結果として所期の目標はある程度達成されたと考えてはいるものの、技能向上に関しては、参加者の感想からはある程度達成されたことが伺えるが、客観的な効果測定は十分にはできていない。短期英語集中講座における技能向上を CASEC（Computerized Assessment System for English Communication）等の民間のテストを用いて測定した例が吉朝（2021）などにより報告されているが、今後こうしたテストを活用することは一つの方法であると考えている[8]。

その場合、今回の講座は意欲向上や啓発といった情意的側面の効果を狙ったプログラムであることから、講座のデザイン及びコンセプトそのものを考える必要もあると考えている。中でも学習量（≒講座実施期間）や形式を含むアウトプットのレベルについては十分考慮しなければならず、実施形態とそのデザインコンセプトについて継続的に検討していくことを考えている。

6.2 次のステップの活動の案出

6.1 と関連するが、参加者は間違いなく学習意欲が向上し、高次レベルの活動へのレディネスが成立していると考えられることから、講座の改善そのものとは別に、今回のコンセプトに基づく講座を入門的なものと位置づけ、それとは別に発展的プログラムを開発することは一つの方向性となり得ると考えられる。

発展的方向性の一つとして、熊本高専の GE 事業では本来「海外における活動への積極的参加」を意図しており、実際に複数のプログラムを準備していたが 2020 及び 2021 年度はその実施を見送らざるを得ず、2022 年度も大変残念ながら実施の確証は得られていない状態である。

そこでもう一つの方向性として、「国内でのより長期の実践的講座」の実施は考慮の余地があると考えている。熊本高専では熊本キャンパスに国際寮（国際棟）が完成し、今秋より運用されることになっているが、こうした施設も活用することで、他高専の学生や留学生の参加を得て、より活性化されたプログラムを実施することができれば、異文化理解や、言語技能以外の部分でのコミュニケーション能力向上に資するものと考えている。

また、そうした大掛かりなものでなくても、今回の講座で得たノウハウや学びの意欲を日常の継続的活動に昇華させることは教員・学生双方にとって意義のあることであると認識している。付言すれば、そうした活動に留学生が関与することになれば、活動の活性化に寄与するだけでなく、留学生の自己評価の向上、ひいては高専で学習することそのものへの再評価にもつながるのではないかと期待している。

7．謝辞

本論文の執筆のきっかけとなった「高専低学年生のための夏期英語集中講座」実施にあたっては、本校非常勤講師である Richard Brian Ambrose 先生と Benjamin James

Crowther 先生の両名に、講座の準備段階から 3 日間の実践にいたるまで多大なご協力を頂いた。両先生にそれぞれのテーマについて活動を適切に実践頂いたことが講座を成功に導いてくれたことは疑い得ない。ここに衷心より感謝申し上げる次第である。

Ben Youssef Amira、Nur Alifa Ilyana Binti Badli Shah、Damtsagdorj Nyamdavaa、Nurhanis Zahirar Binti Mohd Haniff の 4 名の留学生も準備段階から TA として講座に携わってくれた。講座実施期間、COVID-19 による移動制限のために、母国で家族に会うどころか国内での移動すら控えることを強いられていた状況下で、自分の研究や学習の時間を割いて献身的に支援してくれたことは間違いなく講座の活性化につながっただけでなく、異文化の相互理解の得難い機会を参加者に与えることとなった。

ある留学生が言っていたように、この講座が新しい日本人学生と知り合うきっかけとなり、留学生自身の行動の広がりにも寄与したならば、望外の喜びである。4 名の留学生にも同様に心から感謝の意を表する。

（令和 3 年 10 月 11 日受付）
（令和 3 年 12 月 24 日受理）

参考文献

(1) 文部科学省：「独立行政法人国立高等専門学校機構の中期目標」, https://www.kosen-k.go.jp/Portals/0/resources/information/mokuhyo280426.pdf（2021.9.15 閲覧）
(2) 文部科学省：「独立行政法人国立高等専門学校機構が達成すべき業務運営に関する目標（中期目標）」, https://www.kosen-k.go.jp/Portals/0/upload-file%20folder/01_%E7%B7%8F%E5%8B%99/4th-chukimokuhyo.pdf（2021.9.15 閲覧）
(3) Iowa State University：”Revised Bloom’s Taxonomy” , https://www.celt.iastate.edu/teaching/effective-teaching-practices/revised-blooms-taxonomy/ （2021.9.15 閲覧）
(4) 鈴木理恵, 林千賀：「海外語学短期留学の成果－学生の言語的・情意的側面に見られる変化－, 関東甲信越英語教育学会誌, 28 巻, pp.83-96（2014）
(5) 吉田三郎, 小寺光雄：「短期海外語学研修が高専学生の英語力にもたらす効果」, 福井工業高等専門学校研究紀要, Vol. 43, pp.111-122（2009）
(6) 高専機構国際交流室：「平成 23 年度テマセク・ポリテクニック技術英語研修引率教員報告書」, （2012）
(7) 松井康, 関田巌：「2018 年度フィリピン・セブ島での語学留学に関する報告」, 筑波技術大学テクノレポート, Vol 27, pp.43-48（2019）
(8) 吉朝加奈：「「夏期英語集中講座」－1997 年から 2019 年までの取り組みとその成果－」, 東邦大学教養紀要, 第 52 号, pp.79-92（2021）
(9) 森秀夫：『図式で攻略！英語スピーキング：論理的スピーチ 60＋ダイアローグ 20 で徹底トレーニング』DHC, （2019）